

# **宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2008年度**

宇陀市文化財調査概要 4

2010

宇陀市教育委員会

# **宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2008年度**

宇陀市文化財調査概要 4

2010

宇陀市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、平成20（2008）年度に宇陀市教育委員会が国庫補助事業・県費補助事業として実施した「宇陀市内遺跡」の発掘調査概要報告書（宇陀市文化財調査概要 4）である。
- 2 発掘調査（現地作業及び整理作業）は、平成20（2008）年4月10日に着手し、平成21（2009）年3月31日に終了した。なお、本書の刊行は、平成21（2009）年度事業として実施したものである。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会及び奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、宇陀市教育委員会人権生涯学習課（当時） 課長補佐 柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織及び関係者は、「I 埋蔵文化財発掘調査の概要」に掲載している。
- 5 測量図及び遺構図の方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いているが、一部には磁北（M. N）も使用している。なお、平成14年4月1日施行の測量法改正により、測量の基準が日本測地系から世界測地系になっているが、本書では、これまでの遺跡測量成果等の都合上、日本測地系によっている。
- 6 土層の色調は、「新版標準土色帖」2000年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 （財）日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。
- 7 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、宇陀市教育委員会において保管している。
- 8 本書の執筆・編集は柳澤が行った。

# 目 次

I 理藏文化財発掘調査の概要	1
1 埋蔵文化財発掘調査等の概要	
2 調査組織等	
II 位置と環境	4
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 下城・馬場遺跡第11次発掘調査概要	7
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	
IV 宇陀松山城下町第7次発掘調査概要	13
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	

図 版  
報 告 書 抄 録

# I 埋蔵文化財発掘調査の概要

## 1 埋蔵文化財発掘調査等の概要

宇陀市（旧大字陀町・旧樫原町・旧菟田野町・旧室生村）内では、1960年代以降、土木工事等の開発行為に伴い、生活環境をはじめ、地理的環境・歴史的環境も大きく変化してきている。土木工事等の開発行為の増加とともに埋蔵文化財の発掘調査も市内各所で行われ、周辺の山野とともに大きく景観を変え、その姿を消している。

このような状況のもと、樫原町教育委員会（当時）と大字陀町教育委員会（当時）では、町内遺跡の詳細分布調査を実施し、「遺跡分布地図」の整備をはかってきたところである。2006年1月に大字陀町・樫原町・菟田野町・室生村が合併して「宇陀市」が誕生し、従来の業務等を引き続いて行っているが、遺跡分布調査が不十分な地域もあることから、基礎資料の再整備が必要となってきた。今後も市内各所で開発行為が計画・実施されており、埋蔵文化財の取り扱い等については、「遺跡分布地図」をもとに事業者等とその都度、協議を重ねているところである。

2008（平成20）年度に宇陀市教育委員会が取り扱った埋蔵文化財発掘届・通知・発掘調査等の件数は表1のとおりである。また、2008（平成20）年度に実施した発掘調査・工事立会は表2・図1のとおりである。本書には、国庫補助事業・県費補助事業として実施した下城・馬場遺跡（11次調査）、宇陀松山城下町（7次調査）の発掘調査概要を収録している。なお、下城・馬場遺跡については、発掘調査中のため、調査成果が整理途上にあり、本書にはその一部を登載しているにすぎない。

2009年7月には、「文化財行政の充実」のため、文化財保存課が新設され、当課において引き続き整理作業等を実施した。

表1 2008（平成20）年度発掘届・発掘調査件数等一覧表

遺跡有無確認調査額	埋蔵文化財発掘届（民間）	埋蔵文化財発掘通知（公共）	埋蔵文化財発掘届・通知合計	発掘調査（宇陀市担当）	工事立会（宇陀市担当）	調査件数合計
0	5	0	5	4	5	9

摘要種別	文書年月日	遺跡名	所在地	調査原因	事業主体	工事面積(m <sup>2</sup> )	措置等
埋蔵文化財発掘届（民間）	平成20年4月24日	宇陀松山城下町	大字陀地区下出口 2249-2250-1- 2250-3	個人住宅建設工事	西山牧子	323.16	基礎工法変更に伴う 扁出、2008年4月 宇陀市発掘調査
	平成20年4月23日	中之庄遺跡	大字陀地区生 178番、180番1	携帯電話用 基地局建設工事	㈱エヌ・ティ・ ティ・ドコモ 関西	85.00	2008年7月 宇陀市工事立会
	平成20年6月20日	未定	大字陀地区生 734-735番地	個人住宅建設工事	兼信昭	407.07	2008年8月 宇陀市工事立会
	平成20年11月14日	馬場川遺跡	菟田野地区古市場 1185-4	教会建設工事	福田晋三	489.50	2009年4月 宇陀市工事立会
	平成20年12月16日	夷山城跡	樫原地区笠間 1626番地	空中線鉄塔建設工事	㈱NHK アイチック大阪 大阪支社	50.00	2009年5月 宇陀市工事立会

表2 2008(平成20)年度発掘調査等一覧表

番号	調査種別	奈良町地図番号	遺跡名	開発地	現地圖書 範囲	調査機関 (担当者)	調査原因 (調査者)	工事面積 (m <sup>2</sup> )	面積面積 (m <sup>2</sup> )	調査概要		調査機関 備考	
										遺構	遺物		
1	発掘調査	15-D-364	宇陀松山城下町 (7次調査)	大字宇陀 下出町 2249	宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	個人住宅建設工事 (西山牧子)	2008.4.14 ~2008.4.15	223.16	3	なし	土器、瓦片は既に調査済 基土は既に調査済 石垣	中世~近世の 城下町	本作所取 同調査事業
2	発掘調査	15-D-50	下城・馬場遺跡 (11次調査)	橿原区桝 1295	宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	個人住宅改良工事 (保佐富信)	2008.4.21 ~2009.3.31	1,117	62	基礎土 鉄滓	土器類、瓦器、鉢類、 <整理箱 1箱>	平安時代~古墳時代 中世の遺跡	平成17年度からの遺跡調査 本作所取 同調査事業
3	発掘調査	15-D-79	春坂跡 (4次調査)	橿原区大木 299	宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	新規開発調査 (院市)	2008.5.1 ~2008.6.13	-	38	ピット	土器、瓦器は既に調査済 <整理箱 1箱>	近世の施設	平成19年度からの遺跡調査 別途、査定料行予定 同調査事業
4	発掘調査	15-D-37	宇陀松山城跡 (7次調査)	大字松尾 寺口	宇陀市 教育委員会 (北本洋介)	史跡整備に伴う 新規調査	2009.2.2 ~2009.3.31	-	200	複数 跡、溝	瓦、陶器、瓦砾等 <整理箱 40箱>	近世の施設	同調査事業
5	工事立会	15-D-38	中之庄遺跡	大字地区 生治	宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	個人住宅建設工事 (田代和智子)	2008.4.2 ~2008.4.2	251.05	1	なし	-	縄文時代~中世の 遺物が発見 範囲内	基盤工事は、盛土の 基礎
6	工事立会	102-03	上笠岡下手遺跡	安佐南 5291	宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	新規開発工事 (京治会)	2008.4.15 ~2008.5.1	85	5	なし	-	-	縄文時代の 遺物が発見
7	工事立会	15-D-278	同様遺跡	橿原区桝 2551	宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	新規開発工事 (京治会)	2008.5.8	900	20	なし	土器類瓦器瓦片等 <整理箱 1箱>	中世の遺跡が発 見	同様遺跡
8	工事立会	15-D-38	中之庄遺跡	大字地区 生治	宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	新規開発工事 (柳澤一空)	2008.7.14 ~2008.8.4	85	5	なし	-	-	縄文時代~中世の 遺物が発見
9	工事立会	15-D-362	未定	大字地区 生治	宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	個人住宅建設工事 (柳澤一空)	407.07	1	なし	-	-	平安時代の 遺物が発見	同様遺跡
10	整理作業		平成19年度調査跡 下城・馬場遺跡 (11次)		宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	過年度の調査成果 整理	2008.7.8 ~2009.2.25				-	発掘調査要 報告書の作成	-
11	整理作業		下城・馬場遺跡		宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	過年度の調査成果 整理	2008.5.1 ~2009.3.31					十間塗合	同調査事業
12	整理作業		平城跡		宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	過年度の調査成果 整理	2008.4.11 ~2009.2.25					遺物洗浄室	同調査事業
13	分布調査		市内遺跡		宇陀市 教育委員会 (柳澤一空)	市内遺跡の分布調査	2008.11.10 ~2009.3.19					土器研磨作成	同調査事業
												菟田野町区の調査	同調査事業



宇陀市位置図

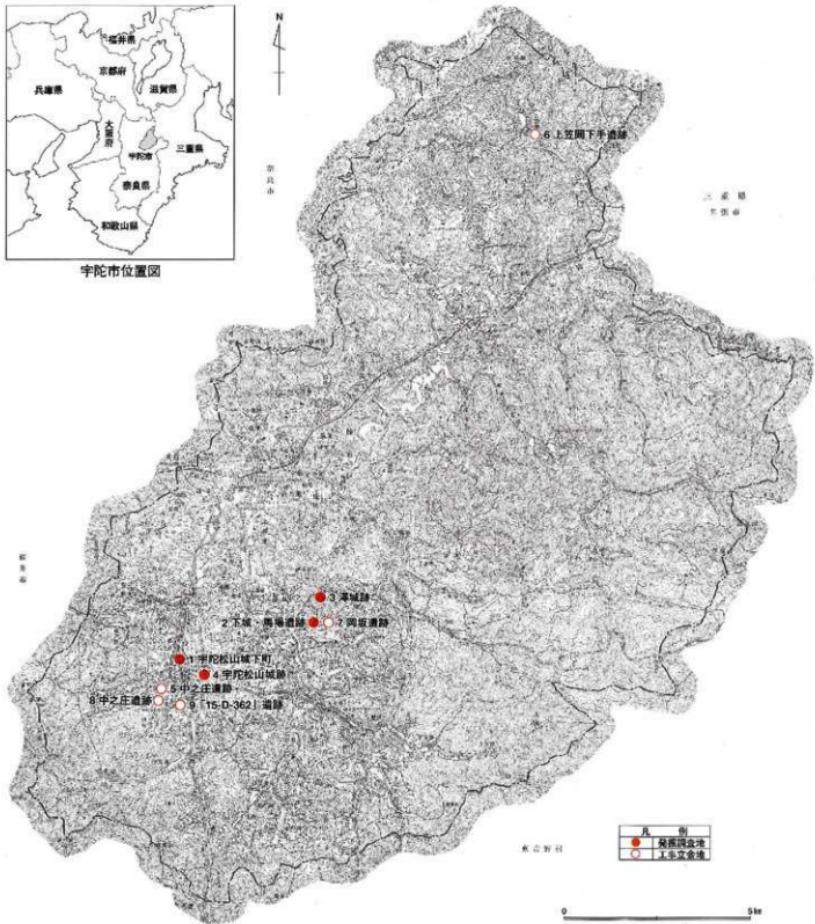


図1 2008(平成20)年度調査遺跡位置図

## 2 調査組織等

2008年度の現地調査及び2009年度の整理作業等の関係者は、次のとおりである（敬称略）。

### 2008年度（現地調査）

事業主体 宇陀市教育委員会  
総括 教育長 向出公三  
庶務 事務局長 字邇幸雄  
参事 異幹雄  
生涯学習課  
課長 中出隆三  
主幹 山口悦子  
調査 課長補佐 柳澤一宏

### 2009年度（整理作業等）

事業主体 宇陀市教育委員会  
総括 教育長 喜多俊幸  
庶務 事務局長 穴田宗宏  
参事 吉村泰和（10月1日～）  
次長 吉村泰和（～9月30日）  
人権生涯学習課（～6月30日）  
課長 中出隆三  
主幹 山口悦子  
整理 課長補佐 柳澤一宏

### 文化財保存課（7月1日～）

課長 尾上清重  
整理 課長補佐 柳澤一宏  
主任 江本宗久

### 下城・馬場遺跡（11次調査）

補助員 野田優人、江本里美、日野原祥子、筒井郁子、松浪智美、太田保美、打越真弓、増田恵美子、増田 啓  
指導・助言 奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所  
協力 砥出臺信、沢自治会、（株）バスコ

宇陀松山城下町（7次調査）

補助員 野田優人、江本里美、日野原祥子、松浪智美、太田保美  
指導・助言 奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所  
協力 西山牧子、佐藤亜聖、山川 均

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

奈良盆地東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、宇陀市（大字陀区、株原区、菟田野区、室生区）、曾爾村、御杖村からなる。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」と総称され、宇陀市の西半がこの口宇陀に含まれている。

口宇陀は標高300～400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも称されている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの峻しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。

宇陀郡の四周はほとんどが山に囲まれており、東が三重県へと続く高見山地、西が大和盆地と宇陀とを区切る音羽山、龍門岳などが連なる龍門山地となっている。南は吉野と接し、関戸峠を越えると紀伊半島を東西に走る中央構造帯を流れる吉野川流域へと至る。北は五条から桜井、株原を経て伊賀へと続く近江・伊賀大断層と呼ばれる構造谷が認められる。この構造谷の北側は急傾斜の断層崖となっており、大和高原とを区切る額井岳（通称 大和富士）、香醉山、貝ヶ平山、鳥見山などの山々が屏風状に形成され、宇陀の地を見下ろしている。

口宇陀を流れる主要河川は、西から順に宇陀川、芳野川、内牧川があり、これらは小盆地、谷部を蛇行しながら他の小支流をあわせ、宇陀市株原区でさらに広い宇陀川となる。その後、宇陀川は室生川をあわせて北東へと流れ、三重県へ至って名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へとそいでいる。口宇陀の西には龍門山地が横たわるため、これが奈良盆地との分水界となっており、大和川流域とは水系を異にしている。この宇陀川の本流は大字陀区宮奥の谷に発し、黒木川、本郷川、中山川などの小支流をあわせて、株原区へと至っている。一方、関戸峠を越えた大字陀区大蔵、栗野などの地区は吉野川の支流である津風呂川の上流域となっている。芳野川は菟田野区岩端を源とし、宇太水分神社の南を流れ、株原区下井足で宇陀川と合流する。芳野川流域と吉野川流域との分水界は、現在も市村界でもある佐倉峠の山系となっている。また、宇陀川と芳野川との間には吉野の山塊から延びてくる標高320～430mの丘陵が横たわり、これらの尾根稜線を境として、現在の大字陀区と株原区、菟田野区との行政区画としている。

これらの地形に沿って古くから様々な交通路が発達し、宇陀地方は大和と伊賀、伊勢そして東国とを結ぶ重要な役割を果たしている。現在の主要交通路は、近江・伊賀大断層沿いの桜井市朝倉、初瀬、株原区萩原、山辺三、室生区大野を通る国道165号線や近鉄大阪線となっており、かつては、伊勢街道（初瀬街道）、青越道などと呼ばれた道である。現在、株原区の市街地が行政・交通の中心的な役割を担っているが、この様相は鉄道が開通した近代以降のことであり、近世以前にはいくつもの道が宇陀を縦横に走り、それぞれが重要な位置を占めていた。

奈良盆地と宇陀とを結ぶ道は、北から西峠、女寄峠、半坂の小峠、上宮奥の大峠を越えるルートが知られており、桜井市忍坂、栗原の谷部を経て小峠を越える半坂越が中心的な役割を果たした。西峠越が国道165号線、女寄峠越が国道166号線となって現在も主要道としての役割を担っている。また、口宇陀を縦断するかのように南北にいくつもの主要道が走り、北へとすると株原を通る伊勢街道を横断

し、香齋峠を経て奈良市都祁町などが位置する大和高原へと至る。南の関戸峠や佐倉峠を越えると、もうひとつの伊勢街道（高見越）へと通じ、関戸峠を越えた三茶屋から南は東熊野街道にもつながる。東への道は青越道のはかに、石割峠を越える伊勢本街道、現在は国道369号線となっている開路（石楠花）・梅坂峠を越えるルートなどがある。

口宇陀には縦横、東西南北の各方面に触手のように道がのび、「壬申の乱」の際、大海人皇子の一行が吉野から宇陀を経て、伊賀へと進んでいったことからも明らかのように、この地域は交通の要衝とし重要な位置を占めている。これらの古代からの道は、国道、県道、町道等に姿を変えているものの、今もその占める役割は変わらない。

## 2 歴史的環境

宇陀地方、なかでも口宇陀地域には縄文時代以降、各所で多くの人々が生活を行い、その痕跡が「遺跡」となって、今の我々に、様々なことを教えてくれる。また、宇陀地方は、「古事記」、「日本書紀」をはじめとする多くの文献にも度々登場し、今に伝える地名、伝承等も多い。

これまでに、宇陀地域では4点の有尖頭器が出土しており、うち、3点が榛原区内から出土している。これらは、縄文時代草創期に求めることができ、この頃が宇陀地域の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの中の遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡や坊ノ浦遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。この時期の遺跡の特徴として、堅穴式住居跡等を設ける低丘陵上遺跡の出現をあげることができ、能峠北山遺跡、平尾東遺跡、五津・西久保山遺跡、五津・峰畑遺跡、大王山遺跡、福地城遺跡などでは、後期から古墳時代初頭に属する住居跡が確認されている。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である台状墓（区画墓）は、これまでに黒木西城跡、胎谷古墳、蓮華山遺跡、見田・大沢古墳群、野山遺跡群、大王山遺跡、下井足遺跡群、能峠遺跡群、平尾東古墳群、西久保山遺跡、キトラ遺跡などで確認されている。弥生時代後期の集落としては、高塚遺跡、能峠中島遺跡、上井足北出遺跡、古墳時代の集落としては、先の遺跡の他、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、谷遺跡、石榴垣内遺跡、坊ノ浦遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や堅穴住居跡などが確認されている。

また、文献資料からではあるが、銅鐸の出土が確認されている。「統日本紀」元明天皇和銅六年（713）秋七月丁卯の条に「大倭国宇太郡波坂郷人大初位上村君東人得銅鐸於長岡野地而獻之 高三尺 口徑一尺 其制異常 音協律呂 勅所司藏之」と記され、この出土地については、詳細は明らかでないが、榛原区八瀧の長坂とも大宇陀区小和田字岡田ともいわれている。

古墳時代前期から中期の古墳は、鴨池古墳、北原西古墳、北原古墳、谷畑古墳、古市場古宮谷1号

墳、シメン坂1号墳、高山1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、口字陀地域の尾根上には数基から十数基単位で分布している。5世紀中葉から後葉に出現てくる古墳群は、後出古墳群、野山古墳群、大王山・蘇楽古墳群などがある。その後、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、6世紀第2四半期の谷脇古墳を先駆けとして、丹切古墳群、能峰古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかかる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した將軍のひとりで渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。このほか、凝灰岩製外容器内から銅製骨蔵器が出土した拾生火葬墓、2枚の鉄板と木炭に包まれた須恵器が出土した岩尾火葬墓がある。

寺院では「女人高野」の別名がある室生寺が知られているところである。古代寺院跡では、安樂寺跡（駒形磨擦寺）の全容が明らかとなっている。金堂跡と考えられる礎石建物遺構とその東側にも礎石建物跡や素掘溝などが検出され、奈良時代初頭に創建、平安時代中頃に焼失したことが明らかとなっている。この他、小附磨寺、小附大谷磨寺、サンジョーポ遺跡からも瓦が出土している。

古代末には、宇陀においても莊園の開発が急速に進み、坊ノ浦遺跡や高井遺跡では、掘立柱建物跡や素掘溝などを確認している。この頃から台頭してくる地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が発展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・澤氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、澤城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、大王山遺跡、能峰遺跡群、八咫島遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

宇陀松山城（秋山城）跡は、中世から近世初頭にかけての宇陀地方の中核的な城郭と城下のあり方を知る上で欠くことのできないもので、その眼下には城下町が広がる。松山伝統的建造物群保存地区と呼称するこの地区は、近世城下における商家町から在郷町として発展し、近世から昭和前期までに建てられた意匠的に優れた町屋をはじめ土蔵や寺社などの建築群、石垣や水路などが一体となって歴史的景観を今日によく伝えている。

#### 参考文献

- 『宇陀・丹切古墳群』奈良県教育委員会 1975
- 『大王山遺跡』株原町教育委員会 1977
- 『能峰遺跡群』Ⅰ 奈良県教育委員会 1986
- 『野山遺跡群』Ⅰ 奈良県教育委員会 1988
- 『高田坂内古墳群』奈良県教育委員会 1991
- 『大和宇陀地域における古墳の研究』宇陀古墳文化研究会 1993
- 『宇陀松山城（秋山城）跡』大宇陀町教育委員会 2002
- 『大宇陀・松山・松山・神戸地区伝統的建造物群保存対策調査報告書一』大宇陀町教育委員会 2001

### III 下城・馬場遺跡第11次発掘調査概要

#### 1 調査の契機と経過

下城・馬場遺跡は、澤城跡から南方へ派生する尾根筋とその間を流れる小支流によって形成された小規模な谷地形の先端部の一角を占めている。古くから澤城の下城といわれ、現在も小字名に「下城」や「馬場」などといった呼称が残っている（図2）。

1984年度には「沢集落センター」建設に伴う発掘調査（1次調査）を行い、縄文時代～弥生時代、中世（12世紀～13世紀）の遺構・遺物を検出している。その後、遺跡高所の平坦面において個人による土地改良工事が計画されたため、1993年度に2次調査、1994年度に3次調査、1997年度に4次調査を実施し、15世紀～16世紀の礎石建物等の遺構をはじめ、多くの遺物を検出し、中世の館跡の一端を明らかにできた。

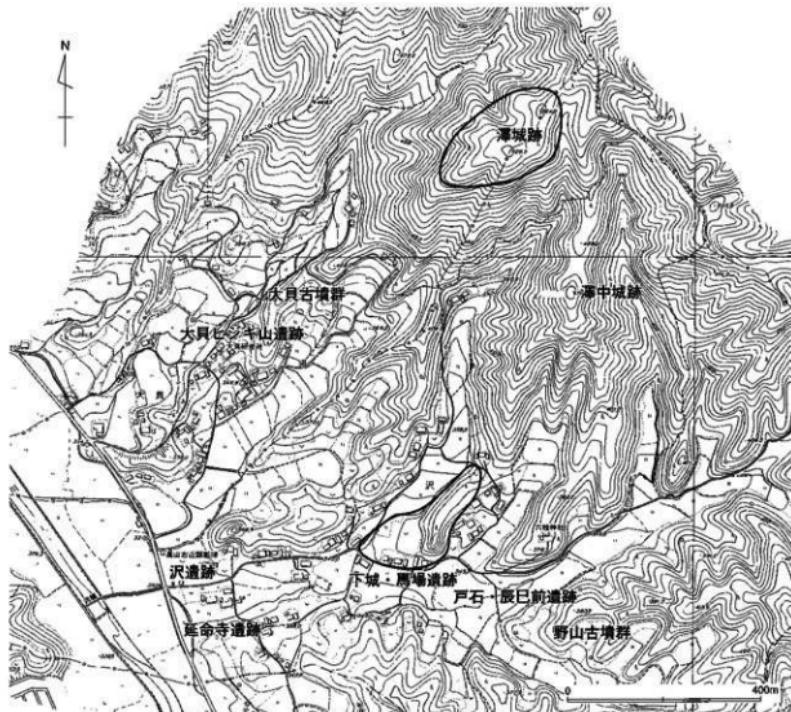
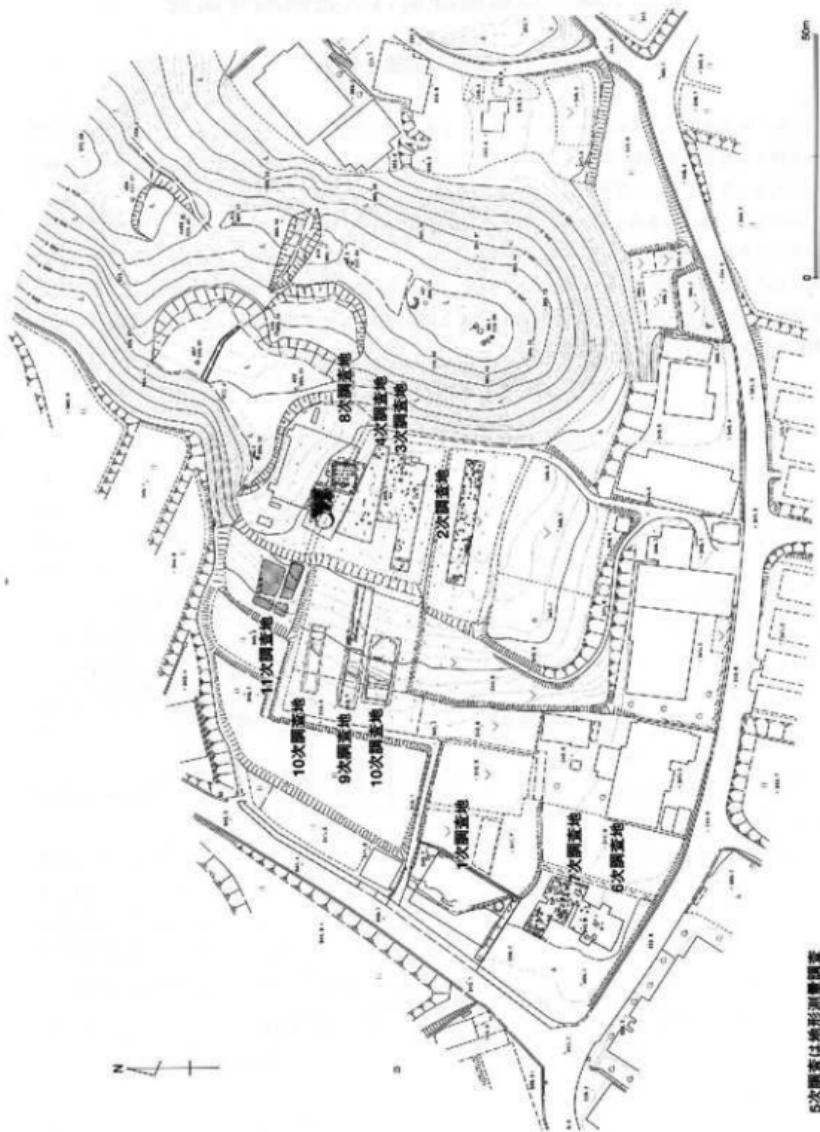


図2 下城・馬場遺跡位置図

図3 下城・馬場道路調査位置図

5次調査は地形測量観測点



これらの発掘調査によって、下城・馬場遺跡は、宇陀地域における有力中世武士団のひとりである「澤氏」の城館跡（居館跡）であることが明らかとなったことから、さらにその状況等を解明することを目的とした範囲確認調査を計画した。1998年度に地形測量等（5次調査）、1999年度には、遺跡南西隅部分の遺構・遺物の状況を明らかにする6次調査を実施し、2000年度には、6次調査地の北隣において7次調査を継続し、あわせて東尾根の地形測量も行った。2001年度には、2～4次調査地北側の遺構・遺物の状況を明らかにすることを目的とした確認調査（8次調査）を実施した。

2003年以降、個人による農地改良工事に伴う事前の発掘調査を実施（9次・10次調査）しており、本調査地で11次を数える（図3）。発掘調査（現地調査）は、2005年（平成17年）7月21日～2006年（平成18年）3月28日にかけて断続的に行なったが、多くの遺物が出土しているため、平成18年度以降、継続して発掘調査を実施しているところである。2006年度は、7月10日～2007年3月30日の間、2007年度は4月17日～2008年3月31日の間、2008年度は4月21日～2009年3月31日までの間、断続的に実施し、まだ、多量の遺物が出土しているため、次年度にその調査を継続することとした。

## 2 位置と環境

下城・馬場遺跡は、尾根稜線から西斜面、標高約339m～370mの一角を占めており、芳野川が流れる西方への眺望が比較的良好で、遠く、宇陀地域の代表的な中世山城である秋山城跡（近世初頭には宇陀松山城）を望むことができる。また、北方には澤城跡や伊那佐山を仰ぎ見ることができる。下城・馬場遺跡の中心は尾根の西斜面に広がり、4段にわたる平坦面が形成されている。遺跡の現状は大半が畠地や水田、山林、周縁部は宅地となっている。

この遺跡の周辺は縄文時代～中世の沢遺跡、弥生時代～中世の延命寺遺跡、古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群などの遺跡が集中している地域でもある（図2）。

## 3 遺跡の調査

今回の発掘調査では、9次調査時に多くの遺物が出土した9-2トレンチの遺物の埋蔵状況を明らかにするため、この調査区を拡張して、11次調査地とした（図3）。

1層（耕作土）、2層（流土等）を除去すると、多量の遺物を含む整地土（3層）を検出した。整地土は、上方から土砂・遺物が交互に傾斜をもって堆積している状況が見える。整地土中の遺物は、少なくとも3回にわたって、上方からの投棄された状況がうかがえる。2006年度は、上面での遺物検出、掘り下げ、遺物取り上げなどを行った。2007年度も引き続いて、第3層の掘り下げ、遺物の検出・取り上げ作業等を行った。遺物の検出・取り上げ作業等はまだ、途上であるが、瓦器碗は、12世紀中葉から13世紀後葉の時期のものが大半を占める（図4～7、図版1・2）。

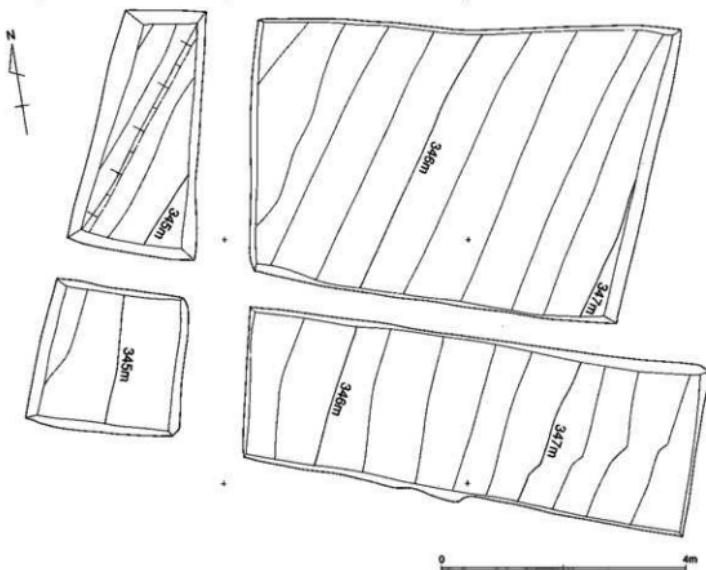


図4 下城・馬場遺跡11次調査地測量図（第3層検出面）

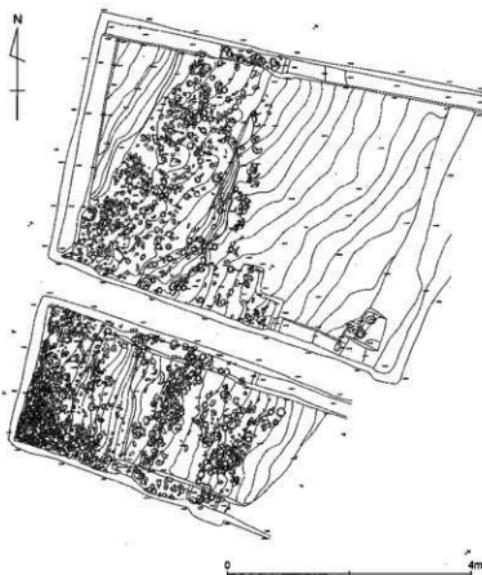


図5 下城・馬場遺跡11次調査地測量図（2006年度 第3層土器群検出状況）

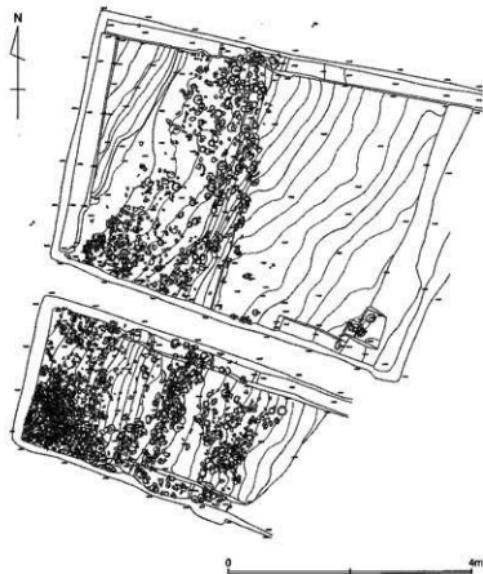


図6 下城・馬場遺跡11次調査地測量図（2007年度 第3層土器群検出状況）

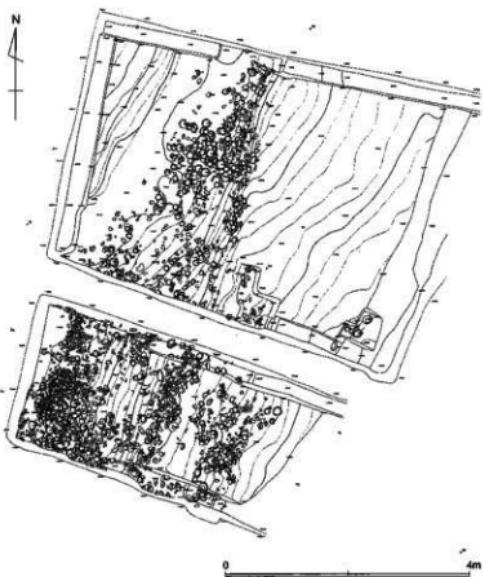


図7 下城・馬場遺跡11次調査地測量図（2008年度 第3層土器群検出状況）

## 4 まとめ

9・10次調査と同様、上段の居館焼失に伴う片付けによって、土砂、遺物などを西斜面へ投棄した状況がうかがえ、これが結果的に12世紀中葉から13世紀後葉の遺物を含む整地土となっており、地形の傾斜によった斜めの堆積状況を示している。整地作業終了後、館の西側に幅約5～6m、深さ1.5m以上の堀を穿っているが、この堀は、現在の土地形状に比較的一致し、南北方向に埋没しているものと推定される。

なお、堀の造営は14世紀中葉以降、堀の埋没（埋め立て）は16世紀後葉頃と現段階では考えている。これが澤氏の居館の終焉とも考えられる。

## 5 抄 錄

遺跡名	下城・馬場遺跡（奈良県遺跡地図番号15-D-90）	
調査地	奈良県宇陀市榛原区沢1295番地（小字名：馬場）	
遺跡立地	標高約339m～370mの尾根稜線・斜面、谷部分	
遺跡規模	南北約200m、東西約200m	
種別	縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の遺物散布地、中世の居館跡	
調査主体	宇陀市教育委員会	
調査担当者	宇陀市教育委員会 生涯学習課（当時） 課長補佐 柳澤一宏	
調査原因	個人の農地改良工事（事業主体：砥出嘉信）	
現地調査期間	2008年（平成20年）4月21日～2009年（平成21年）3月31日	
調査面積	62m <sup>2</sup>	
検出遺構	整地土	
出土遺物	土師器、瓦器、鉄釘、鉄滓ほか	<整理箱 5箱>
資料等の保管	宇陀市教育委員会	
調査後の措置	次年度へ発掘調査を継続	
備考	平成17年度からの継続調査	



写真1 下城・馬場遺跡作業風景

## IV 宇陀松山城下町第7次発掘調査概要

### 1 調査の契機と経過

宇陀市大宇陀区の中心街である旧松山町は、かつてその繁栄ぶりを喻えられ「松山千軒」・「宇陀千軒」と呼ばれた。この町を現在は「宇陀松山城下町」として周知の埋蔵文化財包蔵地として捉え、奈良県遺跡地図にも登載（遺跡地図番号15-D-364）しているところである（図8）。

この松山町のほぼ中心部分の下出口地区において個人住宅建設工事が計画され、2008年3月には埋蔵文化財発掘届が提出された。その後、関係機関等が遺跡の取り扱い・発掘調査の実施方法等を協議した結果、宇陀市教育委員会において発掘調査を担当することとなり、現地調査を2008年（平成20年）4月14日・15日に実施した。

### 2 位置と環境

松山町の形成は国人領主秋山氏の居城とその城下町にはじまる。豊臣政権下では、大和支配の一翼を担う「境目の城」として秀吉・秀長直臣が配され、城郭の大改修と城下町の建設が進められた。関ヶ原合戦の後に入部した福島孝治の治世下に町名を「松山町」と改め、城と町の整備は完成を迎える。しかし、元和元年（1615）に福島孝治は改易され、当地には織田信雄が封じられる。

以後、元禄8年（1695）までの80年間、織田家4代が領することとなる。この織田松山藩の時期、松山町は東山間部の政治・経済の中心となる。その後、織田家は、元禄8年に丹波国柏原に移封され、当地は幕府領となるが、その経済的地位は明治維新まで変わることがなかった。近代に入ってからも宇陀郡役所や裁判所が置かれ、政治・経済の中心的な役割を担った。

### 3 遺跡の調査

#### (1) 調査区と基本層序（図9～11、図版4）

工事予定地（面積：323.16m<sup>2</sup>）のうち、建物建設地の東南辺部分にトレンチ（長さ約3m、幅約1m）を設定し、遺構・遺物の検出につとめた。

基本層序は、トレンチの西端では、第1層がにぶい黄褐色等の整地土、第2層が褐色系の粘質土、第3層が灰黄褐色粘質土等、第4層はオリーブ黒色粘土となっている。建物基礎との関係上、必要以上に掘り下げを行っていない。

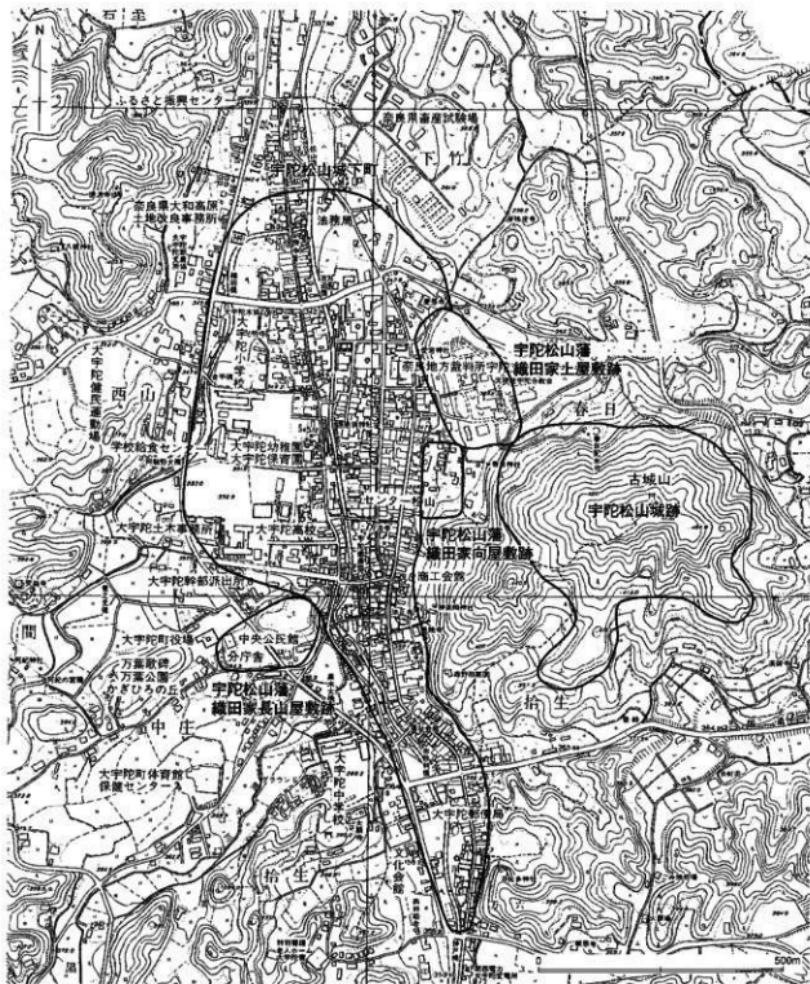


図8 宇陀松山城下町範囲図



図9 宇陀松山城下町7次調査地位置図(1)

## (2) 検出遺構 (図11、図版3・4)

各層間には遺構面が想定できるが、調査面積が狭隘だったため、明確な遺構は確認できなかった。しかし、第1層・第2層間に第1遺構面、第2層・第3層間に第2遺構面、第3層・第4層間に第3遺構面の存在が確認できた。なお、現況地表から第1遺構面までの深さは、10~20cm、第2遺構面までが約40cm、第3遺構面までが約60cmとなっている。

## (3) 出土遺物 (図12・13、表3)

第1層からは土師器、陶器、磁器、第2層からは土師器、瓦質土器、陶器、磁器、第3層からは土師器、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、石製品、火打石が出土した。これらのうち、第3層から出土した9点を報告する。

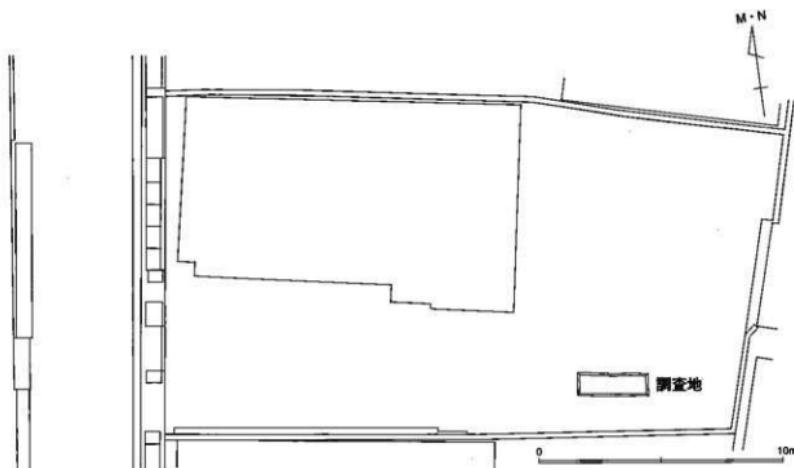


図10 宇陀松山城下町 7次調査地位置図(2)

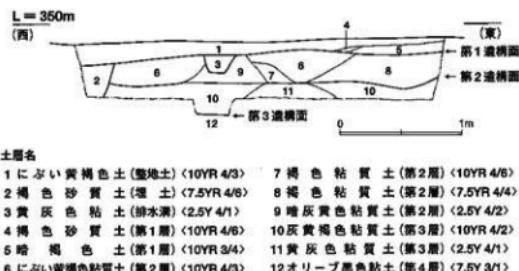


図11 宇陀松山城下町 7次調査地土層断面図

### 陶磁器・土器類 (図12)

- (1) は瀬戸・美濃焼天目碗である。体部は高台から斜め上方にのび、口縁は直立気味となり、口縁端部を外反させる。暗赤褐色の鉄釉を施す。連房第1小期にあたり、17世紀前葉のものである。
  - (2) は肥前陶器碗の高台である。内面に黒色の釉を施す。
  - (3) は古伊万里の碗である。体部は高台から内側して上方にのびる。17世紀中葉に位置づけられる。
  - (4) は肥前陶器 (刷毛目唐津) の鉢で、17世紀末～18世紀初頭のものである。
  - (5) は掲軸陶器の壺で、東南アジア産の可能性も考えられるものである。
  - (6)・(7) は土器器土釜である。口縁部は直線的に外方に開く。大和I型、川口編年III-2型式、17世紀前葉にあたる。
- 以上のように第3層出土遺物の年代は、17世紀前葉～18世紀初頭とやや時期幅が認められる。

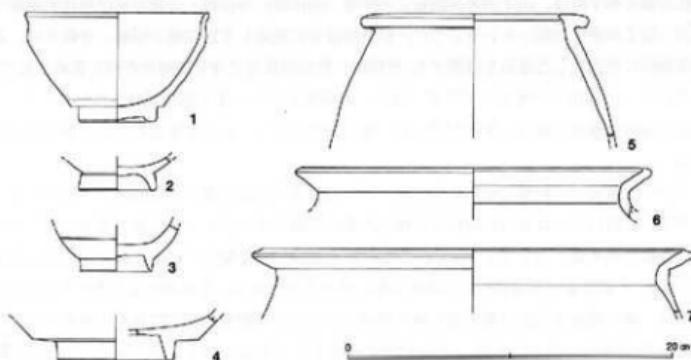


図12 宇陀松山城下町 7次調査地出土遺物実測図 (1)

### 土製品 (図13)

- (8) は、土製円盤（円形加工瓦片）である。瓦を直径約5cm、厚さ1.5cmの円形に加工し、断面を少々、研磨する。玩具の一種と推定される。

### 石製品 (図13)

- (9) は、緑泥片岩を直径約3cmの円形に打ち欠いている。厚さは0.4cmである。玩具の一  
種と推定される。

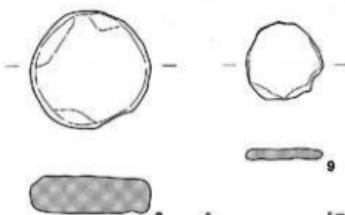


図13 宇陀松山城下町 7次調査地出土遺物実測図 (2)

## 4 ま と め

天正13年（1585）、豊臣秀長の大和郡山入部により、宇陀郡へは豊臣秀吉の家臣である伊藤掃部頭義之が入封する。秋山城を居城とし、以後、秀吉・秀長配下の大名が知行することとなる。関ヶ原の戦いの後、福島孝治が封じられる。秋山城には大規模な改修が加えられ（宇陀松山城）、城下町（松山町）の整備も進んだ。しかし、元和元年（1615）に福島孝治が改易されたことで、城は破却を受ける。この城割役を担ったのが小堀遠江守正一（遠州）と中坊左近秀政である。

城下町は、西口閻門から春日門を結ぶ東西街路を大手筋とし、これに直交する3本の南北街路を設け街区を形成する。城下町の北側には東端の南北街路から宇陀川まで石垣で囲まれた堀割を巡らせる。この堀と宇陀川が惣構となる。宇陀松山城跡の位置する「古城山」北側から西側の山腹・山麓にかけて武家屋敷地が展開していたと推定できる。春日門の内側（山麓側）に広がる武家屋敷地と町人地（城下町）との間は、春日門から南北に延びる石垣によって隔離される。

宇陀松山城と城下町は、山下の河岸段丘上の町屋（松山町）→山腹・山麓の家臣層武家屋敷→山上の城郭部（領主の居住空間）というように、社会的身分に照応して居住域が明確に分離され、高度差の中に階層的に序列化した構造を展開する。空間的・社会的双方で身分の純化が押し進められている。しかもそれは、山城頂上の本丸・天守郭へ向かって収斂していく求心的な構成となっている。また、城下町は流通経済機能の統合・集中が図られ、城を頂点とした元的な構造の中に位置づけられることがある。

福島孝治の改易後、宇陀郡は織田信雄が領した。織田家宇陀松山藩は、元禄8年（1695）まで存続する。当初、藩政の中心は長山丘陵付近に構えた長山屋敷であったが、その後、寛文11年（1671）に春日神社西側に向屋敷、貞享2年（1685）に春日神社北側に上屋敷がそれぞれ造営され藩政の中心は移った（図8）。織田家が元禄8年に丹波国柏原に移封された後は、幕府領となり明治を迎える。

松山町は、城の破却後も江戸期を通じ地域経済の中心として繁栄し、宇陀紙や吉野葛といった周辺地域の特産物を販売するとともに、活発な経済活動を示す町家が数多く建てられ、「松山千軒」・「宇陀千軒」とも称され、活況を呈していた。近世城下における商家町から在郷町として発展し、近世から昭和前期までに建てられた意匠的に優れた町屋をはじめ土蔵や寺社などの建築群、石垣や水路などが一体となって歴史的風致を今日によく伝えていることから、宇陀市松山伝統的建造物群保存地区に選定されている。

本調査地は、調査面積が狭隘なため、当調査区（町人地）の詳細な全容は明らかにできないが、各層間に渡り遺構面が確認でき、先述の出土遺物等から現段階では、第1遺構面が明治時代以降、第2遺構面が18世紀前葉以降、第3遺構面が16世紀末～17世紀初頭頃と推定できる。第3層出土遺物の中には、瀬戸・美濃焼天目碗などの茶器が認められることから、当時の町人層の暮らしの一端を窺い知ることができる。

## 5 抄 錄

遺 跡 名 宇陀松山城下町（7次調査）<奈良県遺跡地図番号15-D-364>  
調 査 地 奈良県宇陀市大宇陀区下出口12249番地  
遺 跡 規 模 南北約1,500m、東西（最大）約600m  
種 別 中世～近世の城下町  
調 査 主 体 宇陀市教育委員会  
調 査 担 当 者 宇陀市教育委員会 生涯学習課（当時） 課長補佐 柳澤一宏  
調 査 原 因 個人住宅建設工事（事業主体：西山牧子）  
調 査 期 間 2008年（平成20年）4月14日～2008年（平成20年）4月15日  
調 査 面 積 約3m<sup>2</sup>  
検 出 遺 構 なし  
出 土 遺 物 土師器、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、石製品、火打石

<整理箱 1箱>

資料等の保管 宇陀市教育委員会  
調査後の措置 工事実施



写真2 宇陀松山城下町作業風景

表3 宇陀松山城下町(7次調査)出土遺物観察表

件名番号	器種	法量(cm)	色調・胎土・焼成	備考
岡12-1	陶器 天目碗	復元口径 11.0	色調 胎土 暗赤褐色 (5YR 3/6)	第3層出土
		高台径 4.6	その他 にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	瀬戸・美濃
		器高 6.8	胎土 精良 焼成 良好	
岡12-2	陶器 碗	高台径 4.6	色調 胎土 黒色 (10YR 1.7/1)	第3層出土
		現存高 1.8	その他 褐色 (10YR 4/6)	肥前
			胎土 精良 焼成 良好	
岡12-3	磁器 碗	高台径 4.4	色調 内面 灰白色 (10Y 8/1)	第3層出土
		現存高 2.9	外面 灰白色 (10Y 8/1)	古伊万里
			胎土 精良 焼成 良好	
岡12-4	陶器 鉢	復元高台径 7.0	色調 内面 灰黄色 (2.5Y 7/2)	第3層出土
		現存高 2.8	外面 にぶい黄褐色 (10YR 6/3)	肥前
			胎土 精良 焼成 良好	
岡12-5	陶器 壺	復元口径 14.0	色調 内面 にぶい褐色 (7.5YR 5/3)	第3層出土
		現存高 7.6	外面 灰褐色 (7.5YR 4/2)	東南アジア産?
			胎土 精良 焼成 良好	
岡12-6	土師器 土釜	復元口径 21.0	色調 内面 棕色 (7.5YR 7/6)	第3層出土
		現存高 3.2	外面 棕色 (7.5YR 7/6)	
			胎土 精良 焼成 良好	
岡12-7	土師器 土釜	復元口径 26.0	色調 内面 にぶい褐色 (7.5YR 7/4)	第3層出土
		現存高 3.9	外面 にぶい褐色 (7.5YR 7/4)	内外面とも煤付着
			胎土 精良 焼成 良好	
岡13-8	土製品 土製円盤 (円形加工丸片)	直径 5.0 厚 1.5		第3層出土
岡13-9	石製品 石製円盤	直径 3.0 厚 0.4		第3層出土 綠泥片岩

## 参考文献

- 藤澤良祐 1993『瀬戸市史』陶磁史篇4 瀬戸市
- 藤澤良祐 1998『瀬戸市史』萬古史篇6 瀬戸市
- 菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会
- 川口宏海 1990「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』IV 日本中世土器研究会
- 大和郡山市教育委員会 2001『馬司遺跡第1次発掘調査報告書』大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
- 大字陀町教育委員会 2001『大字陀・松山一松山・神戸地区伝統的建造物群保存対策調査報告書一』
- 大字陀町教育委員会 2002『宇陀松山城(秋山城)跡』

出土遺物については、元興寺文化財研究所 佐藤亞型氏、大和郡山市教育委員会 山川均氏からご教示をいただいた。末筆ではあるが、記して感謝の意を表したい。

図 版



整地土內遺物出土狀況（垂直）



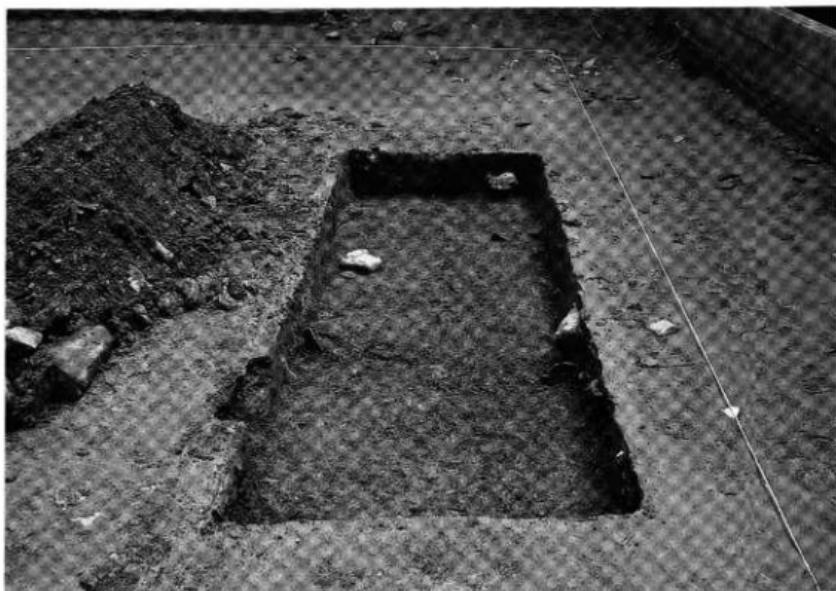
整地土内遺物出土状況（西から）



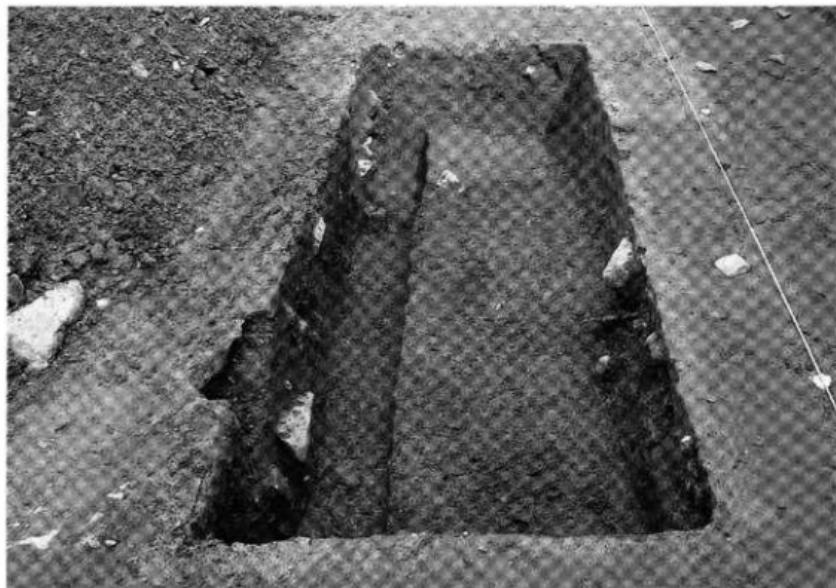
整地土内遺物出土状況（南西から）



調査前（南西から）



第1造構面（西から）



第2 造構面（西から）



土層断面（南西から）

# 報告書抄録

ふりがな	うだしないいせきはくつちょうさかいようほうこくしょ							
書名	宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2008年度							
副書名								
卷次								
シリーズ名	宇陀市文化財調査概要							
シリーズ番号	4							
編著者名	梅澤一宏							
編集機関	宇陀市教育委員会 文化財保存課							
所在地	〒633-2164 奈良県宇陀市大字陀区拾生1846番地 TEL 0745-87-2274							
発行年月日	西暦 2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
下城・馬場遺跡 (11次調査)	奈良県宇陀市鷺原区 沢1295番地	29212-5		34度 29分 33秒	135度 58分 07秒	2008.4.21 ～ 2009.3.31	62	個人農地 改良工事
宇陀松山城下町 (7次調査)	奈良県宇陀市大字陀区 下出口2249番地	29212-5		34度 28分 53秒	135度 55分 55秒	2008.4.14 ～ 2008.4.15	3	個人住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下城・馬場遺跡 (11次調査)	遺物散布地 城館跡	縄文～古墳、中世 中世	整地土	土師器、瓦器、鉄釘、 鉄滓他				
宇陀松山城下町 (7次調査)	城下町	中世～近世	なし	土師器、瓦質土器、 陶器、磁器、石製品、 土製品、火打石				

宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2008年度

宇陀市文化財調査概要 4

2010年3月31日 発行

編集 宇陀市教育委員会事務局 文化財保存課  
奈良県宇陀市大字陀路1846番地

発行 宇 陀 市 教 育 委 員 会

印刷 共 同 精 版 印 刷 株 式 会 社  
奈良市三条大路2丁目2-6